

文部省統計数理研究所

教授 村上 征勝

いるため、統計的なものの見方や考え方を身につけさせる統計教育が十分に行なわれていないことにある。

このことは、たとえば、米国ではハーバード大学、スタンフォード大学、カリフォルニア大学等の有力大学のほとんどが統計学科を有しているのに対し、五百を超える日本の四年制大学に統計学科が皆無であるという教育体制の不備や、高校において一人一台のパソコン教育を目標とした教育用パソコン整備五カ年計画を推進する一方で、学習指導要領改訂の度に統計に関する教科が後退していくという教育政策にも見ることができる。

ちなみに、平成6年度から適用されている高校の新指導要領の下では、「確率分析」と「統計処理」が、生徒の能力、進路などに応じて内容を部分的に選択できる数学Bと数学Cにそれぞれ含まれているが、あるアンケート調査によると、来年度数学Bで「確率分析」を選択する予定の高校は理科系で80%、文科系で50%、数学Cで「統計処理」を選択する予定の高校は理科系で30%、文科系で10%であるという結果が出ている。

もし、この調査結果の通りに全国の高校で授業が行われるとすると、高校における統計教育の将来は暗澹たるものがある。

ところで原因の第二は、統計の研究者の側にある。統計学会の統計教育委員会で、統計教育のあるべき姿が検討され、またその実現へ向けて熱心な議論が続けられてきてはいるが、残念ながら、多くの統計研究者の統計教育への関心は低く、そ

の重要性はあまり認識されていないと言わざるを得ない。

自らの学問の将来にかかわる事でもある。統計の研究者自身、統計教育の充実のために、より一層努力する必要がある。

*

今日では、コンピュータと統計分析ソフトウェアの発達・普及で、データをインプットさえすればコンピュータは分析結果をアウトプットしてくれる。しかしながら情報処理の主体はあくまでも人間であり、コンピュータや統計分析ソフトウェアは情報処理の道具にすぎない。道具を熟知することも重要ではあるが、それ以上に、情報の収集、選択、吟味から、分析法の検討、計算、分析結果の解釈に至る統計的な思考力・洞察力・分析力を身につけることが重要である。

確かに小学校、中学校、高等学校、大学等で統計教育に熱意をそそいでいる先生はおられるし、また、総務庁統計研究所や統計数理研究所、あるいは民間の機関等で社会人を対象とした統計教育が行なわれてはいる。しかし、まだまだ十分とはいえない。情報化が情報“過”や情報“禍”にならないようにするために、科学的な情報分析法に関する教育の充実が望まれる。

コンピュータに関する教育も重要であるが、統計教育を軽んじていては「仏作って魂入れず」ではないだろうか。

〔統計情報1994.9月号より〕